

リナレイさん、R—1
8 枠にIN

植村朗

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

新世紀エヴァンゲリオン リナレイさん、本編にIN

<https://novel.syosetu.org/104988/>
のサイドストーリー。

本編で書けない18禁部分を補完しています。

基本的に本編優先のため、こちらは最初から半放置状態（常時未完）です。
あとリナレイさんの性格が性格のため、エロくなるかどうかは不明。

目次

19.	5、リナレイさん、イチャラブとも 逆レイプともつかぬシチュエーション	1
(本番無し)	にIN	1
24.	5、シンジくん、リナレイさんにI N (初体験)	7
41.	5、リナレイさん、更衣室にIN (本番なし)	16
49.	5、バカツプルさん、いつもの甘々 プレイにIN (本番あり)	25

19. 5、リナレイさん、イチヤラブとも逆レイプともつかぬシチュエーション（本番無し）にIN

ギシツ：灰色の部屋で、一組の男女を乗せたベッドが軋む。

：組み敷いている側が少女で、組み敷かれている側が少年だ。

綾波レイの細い腕は、まるで二匹の白い蛇のごとく、

碇シンジの背と腕に絡みついていた。

「ふふっ、碇くん、捕ま^{つか}くえたっ♪」

レイは楽しげにそう言ってシンジの首筋^{うなじ}に口づける。

小鳥のように啄み、次に子猫のようにちろちろと舐めた。

くすぐったさと、それに混じる電流のような快楽に、シンジの身体が震える。

「つ……きよ、今日は、NERV本部に行くんだろ…？」

「こんなこと、してる場合じゃ…」

「テストは午後2時からだよ。まだ大丈夫」

レイはシンジの逃げ口上をサラリと封じた。

青い髪がシンジの頬を撫でる。

花のようなシャンプーの香りと、少女の汗の匂いが混じり合い、
シンジの理性を溶かしていく。

「えーい、まどろっこしい事は抜きにしよ。うーりゃっ！」

レイは自分のスポーツブラを捲り上げた。

情緒も雰囲気もあつたものではない、思い切りの良い動き。

白い二つの膨らみが鞠のように跳ねた。

「ちよっ…!?!綾波さっ…んむっ?!」

「啞えて? 齒は立てちゃダメだよー?」

シンジが目を見開いた瞬間、桃色の先端が彼の口に押し込まれる。

静かだが、有無を言わせぬレイの言葉が、シンジの頭の上から降った。

年相応の娘らしく微笑みながらも、

レイは娼婦のように少年の口を蹂躪し、

かと思えば慈母のように優しく頭を抱く。

「ん、んんっ…!」

シンジの喉から声が漏れる。

同世代の美少女の、柔らかい胸に触れている事による性的興奮。

赤ん坊のように頭を撫でられ、乳房を含まされる安心感。

相反する不思議な感覚に溺れながら、

シンジは唇でレイの膨らみに吸いつき、舌を絡みつける。

敏感な先端部分に熱いぬめりを感じたレイは、

「きゃうっ!?」 っと子犬のような声を上げた。

（うっひゃあ…思ったよりガッツついてくるなあ。

無意識の動きかもしれないけど…

てゆうか、碇くんってば結構、上手いつ!?

ヤバあ…背スジがゾクゾクするうっ…!

ええい、このまま主導権を奪われてたまるかっ!）

レイは心臓まで伝わる快感に耐えながら、

シンジのベルトに手を掛け…ホックを外し、ファスナーを降ろす。

反撃に移ったレイは、ニヤリと笑った。

「お? 碇くんはブリーフ派ですか?」

「…ふはっ! 綾波さん、そこはっ…!」

シンジは慌ててレイの胸から口を離れた。

少女の笑みは、苦笑へと転じる。

「下は全部脱いだ方がいいと思うけどなー。

ウチは男物モンの下着とか無いからね？

履いたまま暴発したら、あたしのパンツぐらいしか貸せないよ？」

「そ、それは…ちよつと、困るかな…！」

「それに万が一、一いち張羅ちやうらの学生ズボンが汚れちゃったらエライ事だよ？」

黒地に白いカピカピが染みついちやつたまま本部に行つた日にや…

伊吹マヤちゃん二尉あたりに『不潔…』つて汚物扱いされるね！

碇くんもきつと光ハイライトの消えた目で『最低だ…俺つて…』とか呟く羽目に…」

「わー！わーッ！脱ぐ！脱ぎます！」

妙に生々しい想像を膨らませるレイの言葉に、

羞恥に震える手でズボンと…プリーツを脱ぎ去るシンジ。

露出したシンジのそれ…葛城ミサトは「普通サイズ」などと称していたが、

レイは「おお」と感嘆の声を上げ、おもむろに屹立する彼のモノに跨つた。

黒いスパッツの股間部が押しつけられる…。

湿つた音を立てながら、内側から海水の香りのする熱い液体が染み出してくる。

聴覚、嗅覚、視覚、触覚…多重の刺激に、シンジは吐息を漏らした。

「っ、あや、なみ、さっ…!？」

「あはっ、スパッツ越しなのに、碇くんのアレすっこが凄く熱くなってるのが解る。

そつかー、二人乗りの時はこのコが元気になつてたかー…」

布地に浮いた縦筋が、シンジの裏筋を舐め上げる。

布一枚隔てた性器同士が擦れ合う。

挿入にこそ至っていない…：いわゆる素股ではあるが、

二人の息は徐々に荒く…：性感は急速に高まつていく…

形の良い乳房を震わせながら、

ぐいつ、ぐいつ、と腰を押しつけるレイの動きに、

シンジは反射的に縋りつくように彼女の背に両手を回した。

「つふ…あ、凄い、この、感じっ…！」

あたしが、碇くんを、征服してるみたいっ…！」

「ううっ…：そんなに、されたらっ…：僕、すぐに…！」

「イイよっ…：このまま、昇り詰めちやおっ…：いい、かり、く…んっ！」

「あ、ぐっ…：綾、波さっ…：んんっ…！」

絶頂を迎えるその時、レイはシンジの唇を奪い、貪るように舌を絡めた。

シンジはギュッと目を閉じ、本体を何度も脈動させて多量の精を噴き出す。

レイの胎内からは、それに倍する量の熱い潮が湧き、

スパッツの布地を抜けて、少年の腹の上にある白濁と混じり合う。

二人のファーストキスは甘酸っぱいスポーツドリンクの味とは裏腹に、濃厚に、溶け合うように、長く交わされた。

レイは余韻に浸りながら、シンジの呼吸が寢息に変わっている事に気づく。

「あ、ヤツバ、やりすぎちったかー…」

あはは、気持ちよくドバーっ^と行ったもんねえ…?」

第2ラウンドは厳しそうだ。

出発までの時間とシンジの体力を考えたら、寝ていてもらった方がいい。

「…本番は次回以降に取っておこうか。
おたのしみ

ひとまずお休みー、碇くん」

いつもの悪戯めいた笑いを浮かべたレイは、

シンジの髪をわしやわしやと撫でた後、シャワーを浴びに行った。

24. 5、シンジくん、リナレイさんにIN（初体験）

碇シンジは戦いの前に死を幻視し、

綾波レイは窮地の中で一度は生を諦めかけた。

少年は少女を守り、少女は少年を助けるために力を振るい、

その末に、使徒から薄氷を踏むような勝利をもぎ取る。

二人は死を強く意識したが故に、

命の温もりが、生き延びる力となった事を感じた。

あの戦いから数日…。

シンジとレイは、深く、絡み合うような口づけを交わし合っていた。

「ん、んんっ…」

「…んううっ」

二人の間を隔てる衣服はとうに無く、

汗が浮いた裸の背を、互いの掌がなぞっている。

レイの部屋…冷たいコンクリートの壁とは裏腹に、ベッドの上の熱は高まっていく。

「いつ死んでも悔いが残らないように」

という言葉は、いささか語弊がある。

どんな形であれ、死にゆくものは今わの際に悔いを残し、残された者は、続く生を後悔するだろう。

だがそれでも、それだからこそ、

彼らは、生を、存在を、確かめ合っていた。

「つ…はあつ…」

「…はつ、あ…んつ」

何度目かの息継ぎの後、レイは一度ついばむような口づけをして、シンジの左胸に耳を当てた。感じる、彼の鼓動の音。命のリズム…。

「碇くん、頭なでて」

「うん」

求められるままに、シンジは青く柔らかな髪に掌を置き、

頭頂部から後頭部へ…壊れ物を扱うように…何度も、何度も、撫でる。

レイはその心地よさに溜め息を漏らしながら、

少年の胸板に、すりすりとして己の頬を繰り返し擦りつける。

白い二つの膨らみが、彼の腹の辺りで柔らかく形を変えた。

「ふあう…碇くん、碇くん、いかりくん…」

「ぼかぼかするよう……溶けちゃいそうだよ……」

女子生徒としての快活な声とも、エヴァを駆る戦士としての姿とも違う。

呂律が怪しくなりながら、何度も自分の名を呼ぶ愛らしい声と、

安心しきつて甘える仕草を、シンジは優しく見守った。

「綾波さん、なんだか猫みたいだ」

「んー？ふふっ……エヴァのインターフェイス、借りてこよっか」

シンクロ補助のためのインターフェイス・ヘッドセットは、

ちようど猫耳に似た三角の形だ。

トロンとした瞳のまま冗談めかすレイの言葉に、シンジは笑い返した。

撫でる場所を変え、舌を這わす場所を変え……

幾つかの言葉と、微笑ましいじやれ合つたないを交わし続ける。

経験も浅いだけに、互いの技巧は拙つたないものだったが、

それでも敏感な場所に触れるたびに、二人は高まっていく。

「じゃ……おこいでっ」

「うん。行くよ、綾波さん」

レイは足を開き、一番大事な場所をシンジへと曝け出す。

童女のような無毛の縦筋が、てらてらと潤い光る様はひどく淫らで、

避妊具をつけたシンジの剛直が飲み込まれていく光景は、
背德的ですらあった。

「くっ…これが…綾波さんの…中…！」

「いった…あ、あれ？」

シンジは熱く狭い肉壁に本体を締め上げられ、きつきと快樂に呻く。

そしてレイの方は、一瞬眉をひそめた後、きよとんとしていた。

『ピリツとした感覚』はあったものの、痛みというにはあまりにも弱い…。

（…アレかな？運動してるうちに処女が自然と破れちゃったとか…

ってわけでもないな、うん）

学校の女友達とは開けっ広げな話をしているため、

レイはその手の話題シモネタで知識を得ることがあった。

（純情な洞木委員長ウブヒカリちゃんの耳に入らないよう気をつけながら、

という条件付きではあるが）

だが、シンジを受け入れた膣口の隙間からは、

破瓜の血らしき赤い液体が流れており、彼女の予想は外れていた。

「綾波さん、血が…！大丈夫!？」

「ごめん、僕も初めてだから、上手く出来なくて…」

「んー、別にそういう問題じゃないから安心していいと思う。

なにはともあれ碇くんの童貞、はじめゲットだぜー」

シンジが慌てているのは対照的に、レイはお気楽な言葉を発しながら
己の処女喪失ロストヴァージンを非常に冷静に受け止めていた。

そして痛みがなければ、色々と考える余裕も生まれてくる。

(うーん…痛みはないけど、えつち的なきもちもよき性的な快感もないな。

なんかもつたいたい。…あたしつてば不感症つてやつ？

いやでも、さっきまでの前戯は普通に気持ちよかつたし。

この前のスマタなんて溢れるぐらいだったし、違うよねえ？

まーいっか。こうやって肌を重ねてるだけでもあつたかいし。

碇くんのアレがあたしのお腹に入ってる感覚も、なんとか解るし)

レイが思考を巡らせている間、シンジは暴発しないよう息を整え、
掌で少女の頬に触れ、そこから後ろへと流す。

青い髪の下には、形のいい耳が隠れていた。

「…綾波さんの耳、初めて見た気がするなあ」

何とはなくシンジはそこに口を寄せ…みみたぶ耳朶を唇で挟む…

「ふひゃああああっ!?!」

「うわっ!?!ご、ごめん」

急に高い声を上げたレイに、反射的に謝るシンジ。

性的刺激から隔絶され、平然としていたところに、

普段触れられない耳という場所に与えられた未知の刺激…

はっ、と息を飲んだ後、レイは慌てて口元を隠す。

もう遅い。出た声は戻らない。

「いっ…今っ…あたし、すっごい変な声出たっ…ヤバイ。超恥ずかしいっ…」

「そ、そういうもんなの?」

服を脱ぐ時も思い切りよく、その場をガンガンとリードしていたレイだったが、

その彼女が今は真っ赤こいゆーこトになりながら、シンジから目を反らしていた。

「だ、だってさあ! 性行為こいゆーこトすんなら脱いだり触ったりとかは当たり前だし、

別に物怖じする必要ないじゃん!?!でも、でも碓すくんに迂闊な声を聞かれんのは、

すっごく恥はずい!」

「か…かわいい…」

「へ?」

そしてレイのその姿は、男心をいたく刺激し、反撃の隙を与えてしまった。

シンジは唇だけではなく舌を使い、耳の周りや穴まで、丹念に舐め上げていく……背すじをゾクゾクと駆け抜ける快感に、レイの白い肩がビクツと跳ねた。

「や、やだやだっ！耳は弱いからダメだつてばあ！碇くん、意地悪しないでえ！」

「綾波さんがいけないんだ……そんな可愛い顔されたら、そんな可愛い声出されたら、僕が我慢出来る訳ないじゃないかっ！」

シンジも籠たがが外れていた。後から思い出せば赤面は避けられない台詞だろう。

舌のぬめりと唾液の跳ねる音。そして、彼のその言葉が、レイの頭を揺さぶっていく。シンジが腰を前後に動かし始めた時……

レイの脳が自己防衛の為に封じていた秘所の感覚と『チャンネル』が合ってしまった。戻ってくる……痛覚と、それをはるかに凌駕する強烈な快楽……！

「ひあああああっ!?あ、ああっ！あああ——っ!!」

レイは、甘い響きの叫びを上げるのを止められなかった。

たまたらず、自分を責めるシンジの身体に縋りつく。

両手は彼の背に。両足は腰の後ろに回った。

（い、痛いっ!?!のに、すっげー気持ちいいっ！

ちつくしよー！感覚おもえら帰って来るの遅いよバカあ！

胎内ナカも勝手に動いちゃってるっ……

あたしめえ…痛がりのくせに碓くんをあんなに強く啜えこみやがってー！

レイは半ばヤケになって、自分自身に当たり散らしていた。

レイの胎内は、彼女自身の意思を置いてけぼりにして、

自らが処女を捧げた肉柱を愛おしげに抱擁する。

「う…くーはあッ…はあッ…ふッ…ふッ…」

一方のシンジも、レイの身体に熱烈に歓迎され、

普段の中性的な少年らしからぬ、獣のような荒々しい息をついていた。

出し入れされるたびに熱い泉が湧き、粘っこい水音が起こる。

「い、碓くんっ!?!お願い、もつとゆっくり、んんっ!」

聞き入れる余裕がなかったのか、それとも意図的に無視したのか。

シンジはレイの顎を指で持ち上げ、その懇願を口づけで封じた。

経験不足をひっくり返すような身体の相性の良さが、二人を絶頂へと追い詰めていく。

（ううっ…碓くんっ…！完全に獲物をガツガツ食うオスの動きだよコレえ…！

しかも、強引なのに、どっか優しい感じが残ってて…ズルいつてばあ、こんなやつ！

あ…ダメだこれ…耐えられない…）

身を裂く痛み、蕩ける快楽、理性が飛びそうな恐怖、温もりがもたらす多幸感。

複雑な感覚にレイは強く目をつぶり、ガクガクと腰を震わせて頂点に達した。

同時に、彼女の中にあるシンジ自身が震え、ゴム越しに熱い粘液が吐き出される。

ひとつ息をついた後、やっと我に返ったシンジは、

おそるおそる、といった感じでゴムの根元を抑え、自身を引き抜いた。

レイは肩で息をしながら、熱の浮いた赤い瞳で彼を見る。

「ふ、不覚…。碇くんに一気に持つてかれるとは…」

「ご、ごめん綾波さん…僕…」

「ほら、謝らないの。せっかく二人とも『男』と『女』になれたんだし。

よっしゃ、ゴム処理したら二回戦行くぞ二回戦。

今度はあたしが反撃するから覚悟するよーに」

「え、ええ!？」

にまー、と笑うレイを前に、一度取った主導権が高くついた事を感じるシンジ。

彼らは再び求めあう。生を、存在を、確かめあうために。

41. 5、リナレイさん、更衣室にIN（本番なし）

その時、レイの白い10本の指は妖しく蠢き、アスカの乳房をもにゆもにゆと弄んでいた。

最初は拒絶していたアスカの顔が徐々に紅潮し、そして声すらも次第に艶を帯びていく。

レイも最初はバストサイズを馬鹿にされて怒ったかのように見えたが、

だんだん楽しそうな顔になっていった事から、むしろ口実に思っただけだったのかもしれない。

プールの中で絡み合っていた美少女達の艶姿が、シンジの脳裏から離れなかった。

「最低だ…俺って…」

暴走する恋人^{レイ}を止められず、同僚^{アスカ}の叫びを振り切って逃げだした自分…。

シンジは壁に背を預けて床に座り込み、一人称が変わるほどの自己嫌悪に襲われていた。

何分、否、何十分後か？

シンジが顔を上げると、そこには見慣れた赤い瞳と、湿り気を帯びた青い髪があった。驚きの声を上げる前にヒンヤリとした両手に肩を掴まれ、逃げ場がなくなる。

「あ、綾波さつ……ここ、男子更衣室つ……」

「知ってる。大丈夫大丈夫。」

プールはあたし達の貸し切りだし、誰もこないよ」

「アスカはどうしたのさ!？」

「アスカたちはNERV備品に横になって気持ちよく休んでます」

「気持ちよく……って」

アスカは逃れようと暴れて疲れ切ったのか、はたまた揉まれ過ぎて果てたか……

「真実は、知りようがない。」

ふと、シンジは気づく。

更衣室はともかく、大プールは安全管理の名目で監視ぐらいされていたはずだ。

となれば、レイが男子更衣室に歩いて向かう映像も……

「綾波さん。ここのプールって……カメラが……」

「無問題。加持一尉から、MAGIにダミー画像を走らせる方法は教えてもらったし」

「なにやっつてんだあの人!」

穏やかなシンジらしからぬツツコミが、ここにいない不精ヒゲの男に飛んだ。

いや、用意周到なレイの事だ。加持の弱味でも握って脅したのかもしれない。

「ま、碇くんも『その子』が元気なままじゃ治まりつかんでしょ。

暴れん坊の息子さんを宥め^{なだ}んのは、あたしに任せて?」

「っ!」

レイの右手は、シンジの左肩から腕をなぞって脇腹へ：下へ下へ滑っていく。

紺色の海パンを持ち上げ、硬さを主張するシンジの股間に、

冷たい掌が優しく重なって熱を奪う。シンジの全身がビクリと跳ねた。

もう片方の手はシンジの首の後ろに回り：

「あやな、んむっ!」

「んんー?んんー」

有無を言わず重なる唇。

レイの喉から漏れる言葉にならない声が振動と化してシンジに伝わり、

彼の裸の胸に、薄青い水着越しの乳房が押しつけられる。

シンジの鼻をくすぐるプールの塩素^カ消毒^キの匂いは、決して良い香りではないはずだ

が、

普段の少女の肌とは違う匂いと、いつもより低い体温に、興奮は不思議と高まって

いった。

レイが『わりと好きな匂い』と言っていたのは、あなが強ち間違いでないのかもしれない。
 「海パンが窮屈そうだねー？今、楽にしてあげるよん♪」

「やだっ、恥ずかしいよ…」

「あはは、碇くんつてば、相も変わらず乙女かつつーの！」

息継ぎするように口を離し、レイは楽しそうに笑った。

彼女の手はシンジ自身を隠す最後の砦をズルズルと引き下ろしていく。

羞恥に晒されながらも快樂に流されたシンジは抵抗できず、解放された肉柱がピンと跳ねて上を向いた。

血管の浮いた茎は5本の指でそつと包まれ…

シンジの口から、「あ」と悲鳴が短く漏れる。

くすくすと喉を鳴らし、レイは彼の耳元に唇を寄せた。

「すじ凄く熱いよ、碇くんのココ。」

ふふっ…過オーバーヒート熱した操縦桿は、ちやあんとメンテしてあげないとねー♪」

「なにを…あつ!?!」

レイは水着の肩紐を外し、乳房をさらけ出した。

片方の白い膨らみと桜色の頂点を、握ったシンジ自身の先に近づけ…接触させる。

レイの手に操られるまま、シンジの亀頭は、少女の乳輪をなぞるように円を描いた。

「ひあつ…綾波さん、それっ…!？」

「へへー♪アスカつちぐらいあれば挟めたかもしれないけど、

あたしのサイズでもやり方次第ってコト♪

…わっ、いつもより大つきくなってるじゃんっ!

やっぱ碓くんも男の子だねー♪そんなにおっぱい好きかー? んー?」

「あつ! ああつ!」

男にとつて最も敏感な場所を、柔らかい乳房と硬い乳首が交互に舐め回す快感に、シンジ自身の先端、鈴口が魚の口のごとくパクパクと開閉し、粘液を先走らせる。勃起したレイの乳首は、ぬめったそこに『にゆるり』と啜えこまれた。

「うわ、入っちゃったっ!? 碓くん、大丈夫? 痛くない?」

「い、痛くはないけど、凄く、変な感じ…」

レイは恋人を気遣いつつも、彼の中性的な顔が悩ましく紅潮しているのを見て、ふと悪戯めいた笑みを浮かべた。

「えへへー…」

「何、綾波さん?」

「碓くんの処女、はじめもらっちゃった」

「はじっ…!？」

シンジは改めて自分の状態を見直した。

男でありながら、女のように股を開き、

相手の身体の一部を受け入れているという倒錯的な状況。

それを認識した途端、シンジの尿道がキュツと狭まり、

弾力のある少女の乳首を締め付ける。

レイは敏感な場所への刺激に背を震わせた。

「わっ、凄いこれっ！これが『入れる側の感覚』ってやつ？

碇くんっ…いっつもあたしの胎内なかでっ、

こんな気持ちいい思いしてるわけ？あんっ、ズルいぞお？」

「解らないよっ、そんなのっ！いや、確かに気持ちいいけど…」

今のこれは、今までにない感じでっ…あっ、なんだこれっ!？」

甘い声を漏らしながらも、レイはしこった乳首でシンジの中を攻め、熱い亀頭を乳房

で包む。

愛する少女に犯される未知の衝撃…

シンジは完全に腰砕けになり、されるがままだった。

言葉も上手くまとまらず、混乱しているのが見て取れる。

「あ、あぁっ…！」

「ふふっ、あつたかいね、碇くんの中。

そろそろトドメ、イツちゃおっかな？」

無邪気な少女と淫蕩な娼婦が入り混じったレイの笑みが、快感と共にシンジを追い詰めていく。

レイの白魚の如き左手の五指が陰囊をさわさわと擦り、熱い肉柱を捉えた右手が上下にしごきだす。

その動きに合わせて、柔らかい乳房に龟头がぐにゅぐにゅと沈み込めば、シンジはもう耐えられなかった。

「だ、だめだよっ…そんな、いっぺんにされたら僕、もうっ…！」

「いいよっ、おしっこ出しちゃえっ！」

「っ!?ふ、ううっ…!!」

『精液』ではなく、あえて幼稚な言葉に言い換えたレイ。

羞恥と快楽の限界を迎えたシンジは、凄まじい放出感と共に精を噴き出す。

その勢いで、シンジの尿道口に埋まったレイの乳首が弾き出される。

何度も何度も脈を打って、シンジは心地よい乳房の中で長い絶頂を味わった。

白濁まみれになった自分の乳房を見て、赤眼を輝かせるレイ。

「うはーっ、すっげー出たよ碇くん！」

ちよつとどーするー？あたしのおっぱいが妊娠しちゃったらさー♪」

「いや…しないと、思うけど…」

「解つてるよ、言葉のアヤだよ。んもう、こーゆー所はノリがイマイチだねー」

「どう、答えろつていうのさ…」

絶頂の余韻に、肩で息をしながら答えるシンジに、レイは「ぷう」と頬を膨らませてむくれる。

まあ確かに返答に困るか、と苦笑しながら、レイは互いを汚した白濁をハンドタオルで拭った。

タンパク質でカピカピになって洗濯に苦勞するかもしれないが、仕方あるまい。事後処理を受けながら、シンジは申し訳なさげに身を縮めた。

「…その、ごめん。僕だけ気持ちよく…」

「なあに、次のオフン時に可愛がつてくれればいいよ。」

碇くんはとりあえず休んどきなつて。

んじゃ、あたしはちよつくらアスカっちの様子見てくるー」

レイは立てた人差し指を左右に振り、微笑んでみせた。

水着を付け直し、更衣室を後にする。

シンジは未だ赤い顔で、彼女の背を見送った。

次の休日…どう借りを返そうか、と思案しながら…。

プールに戻った時、アスカは意識を取り戻していた…仁王立ち、激おこ状態である。

「バアカナミイーツ！そこに直りなさいっ！前歯全部折ってやるわ！」

「おおつはようアスカつちい!?!こりやまた元気の良いお目覚めでっ!!」

バツシイ！と高い防御音を響かせ、冷や汗を散らしながら、

レイは飛んできた拳を眼前ギリギリで受け止めた。

クレープ食べ放題を餌に和解するまで、彼女達が拳で語り合い続けたのは、また別の

話。

49. 5、バカツプルさん、いつもの甘々プレイにIN (本番あり)

「はあっ……はあっ……碓くんさあ……なんか、今日、やたら熱がこもってないっ!？」
「んっ……ふはっ……綾波さんが言っただんじやないか。」

『次のオフの時に可愛がつてくれればいい』って……んんっ」
「い、言っただけどお！ あうんっ!？」

第八使徒戦……火山での戦いから無事に生還したレイは、自室のベッドの上で声を上げていた。

彼女の疲れを労うように、あるいは帰りを待っていた間の不安を埋めるように、シンジは彼女に奉仕する。

四つん這いの状態で、白い裸身を火照らせるレイ。

「この方がやりやすいから」と、シンジは彼女の股下に顔を潜り込ませ、ピチャピチャと子犬がミルクを舐めるような音を立てていた。

無毛の秘裂に舌を滑り込ませ、丹念に舐める濃厚な口唇愛撫。クニニリングス

経験を重ね、シンジもずいぶん慣れたものだ。

（前から思ってたけど、味も匂いも、なんだか懐かしい感じがする……ああ、思い出した。海の水だ。

「セカンドインパクトから復興が進んで、安全な人工海岸が整備されたから」って……先生に一度海に連れて行ってもらったけど、あの時溺れかけたせいで泳ぎが苦手になっただけ。

でも、なんでだろう。綾波さんの味なら、嫌じゃない。

シンジは一人納得し、愛撫の精度を尚も上げていく。

割れ目の浅瀬から深奥まで這いまわる、シンジの熱い舌。

「ひうつ」と声を漏らして、レイの心身は次第に蕩けていく。

「あたしの大事な場所、赤ちゃんの出口……」

碇くんが、可愛がってくれてるう……！

あ、待ってっ!? 今、そっちまでされたらっ……!?!」

陰唇の上へシンジの口が動き……唇と舌が小突起クリトリスに絡みついた。

決して激しくはない、だが丁寧な動きは、レイを確実に頂点へと導いていく。

「ああっ!? ヤバい、ヤバいっ! これヤバいよお……!」

じわじわって、追い上げられちゃうっ……!」

ひゃああああっ!? うっ……! ううつ……!」

大きな絶頂の波を受け止めて、レイの膝はガクガクと笑った。

ぐいつ、ぐいつ、と顔面に押し付けられる股間を、シンジは不平も言わず受け止める。

レイは存在しない肉柱で強制口淫イラマチオを模すように、腰を前後に動かし……倒錯的な快感に酔いしれた。

快樂の波が去り、レイは恍惚とした表情を浮かべている。

しかしそれは、終わりではなく、始まり。

レイが一度や二度でバテるようなもつたない真似をするはずはない。

「ごめん碓くん。イッたせいで、子宮に火イついたわ」

レイはそう言い放つと、ベッドの傍らにあった小箱を開け、自分の股間をまさぐる。

そして膝立ちになった時、レイの秘所からはピンク色のゴムの幕が顔を出していた。

淫靡な光景に、シンジはゴクリと唾を飲み込む。

「あ、綾波さん。それって?」

「へへへ、女性用コンドーム。輸入モンだよん♪」

日本じゃイマイチ売り上げ伸びなくて、販売停止になっちゃったヤツ。

あ、碓くんはそのままでもいいよ?

普通の男性用と一緒に使うと、逆に塩梅あんばい悪いらしいんだわ」

「なんだか、花が咲いてるみたいだ……」

「ほーう？ これからエロい事しようというのに、ロマンチックな表現をなさる。

ま、あたしが碇くんにまたがるんなら、この方が都合いいでしょ？」

いつの間にか小瓶入りのローションを掌に開けていたレイは、ぬめる白い指の群れを男の本体に絡みつけた。

同時にシンジの背とベッドの間にもう片方の手を滑り込ませ、汗の浮いた互いの上半身を重ねる。

蒼髪を艶めかしく乱れさせ、赤い瞳を悪戯っぽく細めた美少女に、裏筋から雁首、亀頭までをニユルニユルと扱かれ、シンジのそれは硬くなつていった。

「っ……あ……い！」

「んー？ どしたー碇くうん？」

レイの美乳が少年の胸板でむにむにと潰れ、桃色の乳首が弾力を伝える。

上下から襲い掛かる快感に、シンジは真っ赤になつて顔を反らし……

レイは楽しそうに彼の顔を覗き込んで、ちゅ、と唇を一度啄つばんだ。

やがて、淫らに咲いたゴム製の食虫花は、肉茎をたやすく飲み込んでいく……。

「ううっ、あつ……い！ 入つた……綾波さんにつ……」

「あはっ！ 今日も、熱くって硬いね？」

「どんだんあたしの中に入ってくのが解るよ？」

「ほら、もつとくつつこう？ その方が気持ちいいから」

「体位は密着型の女性上位。肉感と温もりを交換しあえる至近距離だ。」

「主導権を握ることを好むレイにとって、女性用コンドームは強力な武器だ。」

「膣奥まで挿入し、腰で8の字を描いた後……」

「小振りで形の良い少女のおしりは、逆ピストンの動きで何度も上下した。」

「レイの胎内に入りする肉茎を中心に腰全体へ……波紋のように熱が広がっていく。」

「犯される快感は凄まじく、シンジはレイの背中に縋りついた。」

「あ、綾波さんっ、綾波さあんっ……！！」

「はあく……カワイイよお、碓くんの甘えん坊モードっ♪」

「前にコレやった時も、ホント気持ちよさそうだったよねー？」

「女の子みたいに高い声あげて、涙まで流して……」

「白いおしっこお漏らししちゃってさ？」

「また見たいな、聞きたいな？ 碓くんのえっちな所♪」

「つつっ!!」

「愛情、性欲、嗜虐心、母性本能……」

清濁を複雑に孕んだ言葉を紡ぎ、貪欲に腰を振り続けるレイはさながら伝承の淫魔^{リリス}だ。

少女らしからぬレイの色気に、シンジは彼女を抱きしめた手を力なく震わせ、赤い瞳を見つめる。

その様子に満足したレイは、腰をゆっくり持ち上げ……

「んーじゃ、このままイカせちゃおおうっ!？」

その時、シンジの肉茎が、一度引いたレイの胎^{はら}を追撃した。

エラを張った雁首に感じる部分を抉られ、レイは声を裏返す。

シンジの左手がレイの尾てい骨から上へ……

中指がリードする形で、白い背筋を、つつうつ、と、なぞった。

「そ、それ、くすぐりたいから、やめ、ふあっ!」

レイの背にゾクゾクとした感覚が走る。

シンジの右手は、レイの頬から蒼髪をかき上げて耳を撫で……そのまま彼女の後頭部へ流れた。

頭を強引に抱き寄せ、互いの頬をすり合わせる。

レイの心臓は大きく跳ねて、血が上った顔に朱が差した。

「い、碇くんってば、時々やたら男らしくなるよね!？」

なに!? 特殊能力!? トランス状態!?

あのっ、調子に乗っちゃったのは謝るからさっ! もうちよつとっ……」

「綾波さん、可愛い。好き。凄く可愛い」

「うううっ……!?!」

泡食って早口になるレイに対し、シンジの方は語彙も何もあつたものではない。

だが、耳元で囁かれるシンジの声は、普段より低く、熱く。

タイミングも、レイにとってはあまりにズルいもので、心地よい脱力感が彼女を襲つた。

その隙を突いて、シンジの舌はレイの口に侵入して、彼女の舌を絡めとっていく。

「ん……むっ!?!」

舌を絡め合い、腰をぶつけ合い、上も下も滅茶苦茶に快樂を貪り合う。

突き上げるピストン運動が早まり、レイの喉から出るのは「ん、んっ」という甘い音。

先程までのレイと違い、シンジには一切の余裕がない。

快樂に翻弄され、流され、呼吸も荒く身体を動かしているだけ……

それなのに彼は、レイの弱点を的確に突いてきた。

限界を前に、二人は息を継ぐように口を離す。

「ふあっ……!?! 碇くんっ、もうダメ! ダメだようっ!」

「僕も……そろそろっ！」

「ね、ギユツてして。強く、痛いくらいにつ……い！」

レイの願いに応えるように、シンジは左腕に力を込めて背を抱き、右腕で頭をかかえた。

肉体の快感と、求められる充足感に、レイの胎内はきつく締めまり……

その刺激を受けて、ゴム越しにシンジの精が放たれる。

「っ……ああっ!!」

交差する嬌声。

絶頂を迎えた少女の波打つ媚肉が、脈動する少年の本体を絡めとり、味わう。

はあっ……はあっ……と重なる荒い息。

蒼い髪を撫でるシンジの掌に、レイは快感の余韻に浸りながら、顔を綻ばせた。

「……えへへ、これ好き。撫で方、優しいの」

「……ん」

言葉なく、撫で続けることで応えるシンジ。

甘ったるい夜は、その日も長く続いた……。